魔法少女まどか？ナノカ

唐揚ちきん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女まどか？ナノカ

【Ｎコード】
Ｎ４７８０ＢＡ

【作者名】
唐揚ちきん

【あらすじ】
なぜか全教室の壁がガラス張りというそこはかとなく狂気を感じる造りをしている見滝原中学校。
そんな中学校に極普通の少年が転校してくる。
少年はこの場所で何を知り、何を学び、何を思うのか。

エピローグ

「初めまして。夕田政夫(ゆうたまさお)です。僕はこれからこの見滝原中学校で皆さんと一緒に学生生活を楽しんで行きたいと思います。皆さん、どうぞ宜(よろ)しくお願いします・・・」

僕は自己紹介の予行練習に書いた紙を読み上げる。
う～ん、少し堅苦しいかもしれない。だが、テンション上げた自己紹介で滑(すべ)ったら、目も当てられない。どうした物だろうか。
散々（さんざん）家でも書き直ししたはずなのに、いざ転入当日になると不安になってくる。

転校生。それが今、僕を一番端的に表す言葉がそれだった。
出会う物や人が新鮮で柄にもなく、どきどきする。
この見滝原中学校がかなり特徴的なせいもあるだろう。
何せ『教室の壁が全てガラス張り』という頭のおかしい設計をしている。体育の時とかどうするのだろうか？本気で気になる。

「夕田君。暁美さん。それじゃあ、教室に向かいましょうか」
考えごとをしていたら、担任の眼鏡を掛けた先生に呼ばれた。
僕ともう一人の転校生が黙って、先生の後に続く。

そうそう、僕が一番不思議に思ったのが、このもう一人の転校生、暁美ほむらだ。
転校生が同じ日に入ってくる。これはまだいい。あり得ないことではない。
問題は、なぜ二人とも『同じクラス』なのかだ。
普通は二人転校生が入ってきたら、人数調整のためにクラスを分けるのではないだろうか。

そして、『暁美ほむら』という少女自身も不思議だ。
名前が、とかそういう下らないことではない。職員室で僕と会った瞬間に、無表情な顔がまるであり得ないものでも見たかのように驚愕に染まった。
そこから怒涛の勢いで質問責めに合った。
「あなたは何者？」とか「あなたはいったいどこから来たの？」とか、やたら早口で聞いてきた。
もし僕が自意識過剰な人間だったら、一目ぼれされたかと勘違いしていただろう。
まあ、暁美ほむらは、びっくりするくらい容姿が整っているから、僕なんかとは釣り合いが取れないだろうが。

そうこうしている内に教室に着いた。
担任はちょっと待っててね、と言った後、教室に入っていった。
当然、僕と暁美ほむらは廊下に取り残される。
僕は初対面の印象からか、この女子が苦手だった。何か僕のこと睨んでくるし。
冷たい印象のある整った顔に見つめられると怖い。なぜ恐怖の代名詞とも言える幽霊が男じゃなく、女ばかりなのか良くわかる。
内心、早くしてくれと担任に念じるが、当人は透けた扉の向こう側では、目玉焼きの焼き加減について盛大に語っていた。おい、あんたマジふざけんなよ！

ようやく、目玉焼きの焼き加減の話が終わり、入室の許可が担任から出される。
僕は、ほっとして教室に入った。

そして、僕は驚愕した。恐らく先ほどの暁美以上の驚愕だ。恐怖と言い換えてもいいかもしれない。

ほとんどの生徒の髪と目の色がおかしい。
取り分け一番ヤバイと思ったのが教室の真ん中辺りにいるツインテールの女の子。

『桃色（ピンク）』

なぜそんな色に染めたのだろうか。そしてそれだけでも十分キてるのに追撃の同色の眼球。恐らくはカラーコンタクトだと思われる。というか顔立ちからして明らかに日本人なのだからそれ以外にあり得ないのだ。

校則違反だとかそんなレベルじゃない。もっと恐ろしい物の片鱗を味わった。

エピローグ（後書き）

受験の息抜きで書きました。へたくそな文章ですがよければ読んでください。

それはとっても勘違い

「夕田君。大丈夫？顔色悪いわよ」

担任の声でフリーズした思考がよみがえる。

「・・・大丈夫です。何でもありません」

そう。大丈夫だ、政夫。落ち着け、クールになるのだ。前の中学校でも落ち着きのある優等生で通ってたじゃないか。

そうだ。素数を数えるんだ。２・３・５・７・１１・１３。いいぞ。落ち着いてきた。

「そう。それならよかった。じゃあ、まず夕田君から自己紹介始めてください。名前は先生が書いておくから」

よし。頑張れ、僕。

クラスメイト達の方を向いて、自己紹介の準備をする。うわ、駄目だ。ピンクが。ピンクが気になってどうしても視線がそっちに吸い寄せられる。

「えー。皆さん初めまして。夕田政夫です」

耐えろ。耐えるんだ。

「僕はこれからここ見滝原中学校で皆さんと一緒に」

こんなに時間が長く感じられるのはいつ以来だろうか。

「学生生活を・・！」

ピンク色の髪の少女の視線と僕の視線がとうとう合ってしまった。
ビクリと僕の心臓が飛び跳ねる。
髪と同じピンクの眼球の直視に耐えられず、僕は思わず目を逸(そ)らしてしまった。

「おくっていきたいとおもいます・・！」
若干口調が早口になってしまったが何とか無事自己紹介を終えることができた。

その後、暁美ほむらも自己紹介を終えて（なぜか暁美もピンク髪の子にガンを飛ばしていた）、僕達は指定された席に座った。
やはり転校生は珍しいらしく、僕の方には男子が、暁美の方は女子が集まってきた。

当たり障りのない挨拶と趣味などについて彼らと話した。
彼らも例に漏れず、髪を染めていたが、ピンクや青という超ド級のカラーリングを見たせいであまり気にならなかった。
一番好感を覚えたのはあまり目立たない男子生徒の中沢君。その割りに担任絡まれることが多いらしい。
いわゆる草食系男子というやつだ。話していてほっとする。
この学校の異常性をまざまざと見せ付けられたせいでまるで別の世界に紛(まぎ)れ込んだかのような気分だったが、ようやく僕が知っている現実らしくなってきた。

「ねぇ、男の方の転校生」

中沢君との会話に癒されていた僕に、不意に女子に声をかけられた。
席に座っている僕を中心とすると中沢君と反対側に青い髪の少女が寄ってきた。

気分よく友達と会話を断ち切られたので、ちょっとむっとしたが顔には出さず、返事をする。

「何かな？えーと・・・」

「美樹さやか。よろしくね」

青髪の女子、美樹さやかは快活に笑った。

正直、好きになれそうにないデリカシーが大幅に不足しているタイプの人間だ。髪の色もかなり奇抜だ。まあ王者（ピンク）よりは幾分かマシではあるが。

「いや～、アンタさっきさ、まどかのこと見つめてたじゃん？もしかして一目ぼれかなーと思って」

「まどか？」

「ああ、鹿目まどか。あたしの大親友。桃色のツインテールの子って言った方が転校生には分かりやすいかな」

なるほどピンク髪の子か。

それにしても随分となれなれしいな。会って間もない人間を『アンタ』呼ばわりとは。

まあ、ごまかす理由もないし、正直に言うか。

「ああ、どうしても彼女（のピンク色の髪）がどうしても気になってね。もし不快にさせたんなら、悪気はなかったって伝えてくれないか？」

「・・・・・」

急に美樹がぴたりと黙った。そして次の瞬間にやにやと下世話な笑みを浮かべた。

「あんた凄いことさらっというのね。ねぇ、今の聞いたまどか？」

美樹の後ろに隠れていたらしい鹿目が顔を赤くして出てきた。

なぜそんなことをしていたのだろうか？さっきのことがそこまで嫌だったのだろうか？

取りあえず、謝っとくべきだろう。

「さっきは不躾（ぶしつけ）に眺（なが）めちゃってごめんな。でも悪気はなかったんだ。ついつい鹿目さん（のピンク色の髪）に目が奪われちゃって」

僕は謝罪をするが、鹿目は先ほどよりも真っ赤になって、うつむく。顔面に血が昇るほど頭にきてるのだろうか。

髪をそんな風に染めているぐらいだから、ひょっとしてこいつらレディースか何かなのかも。

校舎裏とかで奇抜な髪の女子たちに木刀で滅多打ちにされる自分を想像する。普通にありそうで怖い。

「そうだ。転校生、あたしたち帰りにショッピングモールに寄るんだけど、良かったらアンタも来ない」

相変わらずにやにや笑いながら、美樹は僕にそんなことを提案してきた。

つまり、そこで僕を袋叩きにするってことか、何て嫌らしいやつらなんだ。クソ、だがこのままじゃ中沢君まで巻き込みかねない。とにかく、ここは素直に承諾するしかない。

「・・・・わかった。いいよ。僕も行こう」

「そうこなくっちゃ！」

それはとっても勘違い（後書き）

中沢君・・・ごめん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4780ba/

魔法少女まどか？ナノカ

2012年1月14日03時47分発行